授業外での英語学習に関する予備的調査

磯　田　貴　道
広島大学外国語教育研究センター

1　研究の目的

本稿は，授業外での自主的な英語学習を促す取り組みを行うための資料として，広島大学の学生を対象に行った授業外での英語学習に関する予備的な調査の結果を報告するものである。高度な英語運用力を身につけるためには，授業での学習のみならず授業外でも学習を行うことが不可欠であるため，教員側から積極的に教室外学習を促し，必要なサポートを行う必要があろう。そのようなサポートを行うために，学生が現在どのような学習を行っているか，また，授業外の学習に対してどのような認識を持っているか調査することで，どのようなサポートが必要とされるか考えなければならない。

2　研究の背景

大学での英語教育は，学生が研究上必要となる英語の運用能力や，または卒業後就職した際に業務において必要とされる英語の能力を身につけることなどが目的となろうが，それは非常に高度な運用レベルであると言える。しかし，大学における英語の授業時間は，大抵１回90分の授業が週に１回ないし２回程度しか行われない。このように限られた時間での学習のみでは，高度な英語の運用能力を身につけることは不可能であることは経験的事実であろう。それでもなお高度な運用能力を身につけるためには，授業外での学習が不可欠になる（CIEL Language Support Network, 2000)。これは英語のみならず，第二外国語でも状況は同じであると言える（原口，2004)。

また，大学というコンテクストを外れても，外国語の運用能力を高めるには相当の学習時間が必要であり，授業時間だけでそれを達成することは困難である。特に日本で英語（または他の言語）を学ぶ状況のように，対象言語が日常的なコミュニケーションの手段としては使われない外国語環境で学習するとなると，意図的に授業外での学習時間を作ることは不可欠である。日本にいながら外国語の高度な運用能力を身につけた人の学習方法の研究（竹内，2003）では，彼らに共通する特徴のひとつに，自ら積極的に学習を行い，また学習している言語を使う機会を作っていることが挙げられている。同様に，日本以外における研究でも同じ傾向が見られることが報告されている（Naiman, Fröhlich, Stern, & Todesco, 1978, reprinted 1996)。これらの研究の結果からも，外国語環境で高度な運用能力を身につけるためには授業外での学習が重要であることを示していると言える。

このようなことから，外国語を教える教員の立場からは，学習者に授業外でも積極的に学習する機会を作ってほしいと願っている。では，学習を行う側の学習者はどのように感じているのだろうか。筆者自身の経験では，大学生に限ると，英語を勉強したいと思っているにもかかわらず，実際に自分で学習している者の数は少ないのではないかと感じている。彼らと話をすると，英語を身につけたいという希望をもつ者は多いが，実際に身につけるための行動を起こしている者の

数は比して少ないように感じる。また，大学生の話から，勉強の仕方がわからないという声を聞くことがある。時々，どのように勉強したらよいかといった内容の質問を受けることもある。

教室外での英語学習が重要とはいえ，学習者側からみると，実際に自ら学習を行うというのは非常に負担の大きいことではないかと考えられる。何を学ぶか，どのように学ぶかといったことについて学習者自身が判断を行わなければならず，それは学習者自身が教師の役割を演じることと言える。したがって，教員側からの何らかのサポートがなければ容易には学習を行うことは出来ないのではないかと考えられる。そこで，どのようなサポートが必要となるのか知るためにニーズを調査する必要があるが，ここではその第一歩として，学生が現在どのような学習を行っているか，また，授業外の学習に対してどのような認識を持っているか予備的な調査を行い，その結果から大まかにニーズを捉えたい。

3 調 査

3.1 対象者

筆者が2005年度に広島大学において担当していた１年生対象及び２年生対象の英語の授業を受講していた者211名（男子106名，女子105名）に対して調査を行った。このうち，英語を専門とする学科に所属しているのは３名である。対象者の学部，学年別の内訳は表１のとおりである。

表１ 対象者の内訳

学部	１年生	（男子，女子）	２年生	（男子，女子）	３年以上	（男子，女子）	計
経済学部	60	(44, 16)	16	(8, 8)	0	(0, 0)	76
法学部	9	(5, 4)	22	(12, 10)	0	(0, 0)	31
総合科学部	0	(0, 0)	15	(1, 14)	0	(0, 0)	15
文学部	0	(0, 0)	14	(2, 12)	0	(0, 0)	14
医学部	0	(0, 0)	1	(1, 0)	2	(1, 1)	3
理学部	14	(12, 2)	0	(0, 0)	0	(0, 0)	14
生物生産学部	17	(9, 8)	0	(0, 0)	0	(0, 0)	17
教育学部	0	(0, 0)	41	(11, 30)	0	(0, 0)	41
計	100	(70, 30)	109	(35, 74)	2	(1, 1)	211

3.2 データ収集

データ収集の時期は２回に分けられた。まず４月（前期）の第１回目の授業で，２年生を対象としたクラスにおいてデータ収集を行った。その後10月（後期）の第１回目の授業で，１年生対象のクラスにおいてデータ収集を行った。このように２回に分けた理由は，４月の時点では１年生は入学したばかりであり，授業外で学習をする余裕もないであろうと推測されたため，この時点では有効なデータが得られないと判断し，収集時期をずらしたためである。

データは質問紙を用いて収集した。以下，質問の内容と意図について説明する。

質問①から質問②－Ａまでの項目は，現在どのような学習を行っているか，その実態を知るための項目である。

①大学の授業以外に、個人レッスン、英会話スクールなどで英語を教えてもらっていますか

はい　　いいえ

→①－Aにすすむ　　→②へすすむ

①－A　①で「はい」と答えた方

なぜそれを受けようと思いましたか

質問①は，大学での授業以外に何らかの指導を受けて学習しているかどうか尋ねることを目的としている。次の質問②と違い，自分ひとりで行う学習ではなく，何らかの教授を受けて学習をしているかどうかを問う。また，この質問に「はい」と答えたものは，なぜそれを行おうと思ったのか，その理由を①－Aに自由記述で記入する。

②大学や英会話スクールなどで英語を教えてもらう以外に、人に教えてもらうのではなく自分で英語を勉強していますか

はい　　いいえ

→②－Aにすすむ　　→②－Bにすすむ

②－A　②で「はい」と答えた方

どのようなことを行っていますか

質問②は質問①と異なり，指導を受けるのではなく，自分ひとりで何らかの学習を行っているかどうか尋ねる項目である。また，「はい」と答えた者は，②－Aでどのような学習を行っているか自由記述により答えるようになっている。

②－B　②で「いいえ」と答えた方

自分で英語を勉強したいと思いますか

はい　　いいえ

③　(当てはまるものをひとつ選んで番号に○をつけてください)

どのように勉強したら英語が身につくか、自分なりに分かっていますか

1　全く分からない

2　あまり分からない

3　だいたい分かっている

4　よく分かっている

質問②－Bと質問③は，授業外で自ら学習を計画し実行するレディネスがあるかどうか測る項目である。学習者が教室外で学習することは，学習者が自律的に学ぶひとつの学習形態といえる。このように自ら学習を行うためには，学習者の側にそれを行うためのレディネスが必要である。

このレディネスには動機づけや方略の知識など様々な要因が含まれると考えられるが，

Littlewood（1996）は大きくwillingnessとabilityの二つの側面に分けて捉えている。つまり，自分で学習の舵取りをしようとする意思（willingness）と，舵取りをするための技能や知識（ability）が必要とされると考えられている。

これに基づき，質問②－Aでは，質問②で現在は自分では学習していないと答えた者を対象に，自分で学習したいという意思があるかどうか測る。これは上記のwillingnessに関する側面を測ることを目的としている。なお，この項目は現在授業外では自己学習していない者のみが答えるが，すでに何らかの学習を行っているということはwillingnessの表れと解釈できるため，この項目には答える必要はない。

質問③は，上記のabilityに関わるものである。実際にabilityがあるかどうかを測るものではないが，自分で舵取りできるかどうかという点について，学習者自身がどう認識しているか測るものである。この項目はLittlewood（1996）のabilityの考えに拠るものであるが，学生の「勉強の仕方が分からない」という声も背景にある。この項目へは全員が回答する。

3.3 分析

分析は，まず項目ごとに集計を行う。また質問①－A，②－Aの自由記述は分類を行い，いくつかのカテゴリーに分ける。さらに，学習者のレディネスについてより深く知るために，質問①，②，②－Bの各項目と，質問③とをクロス集計する。

4 結 果

4.1 項目ごとの集計結果

表2のように，質問①では，大学の授業以外に何らかの教授を受けていると答えたものは5人（2.3%）であった。

表2 質問①の集計結果

①大学の授業以外に，個人レッスン，英会話スクールなどで英語を教えてもらっていますか

	はい	いいえ	計
度数	5（2.37%）	206（97.63%）	211（100%）

質問①で「はい」と答えた5名は，その理由を質問①－Aで答えている。それを分類すると，4名は将来の目標と英語の関連を述べている。要約すると，将来就きたい職業，留学，旅行といったものが挙げられ，それらに英語が不可欠であるため指導を受けているという回答であった。残りの1名は，自分ひとりで学習するのは十分かどうか分からないので教えてもらっているという回答であった。

表3 質問②の集計結果

② 大学や英会話スクールなどで英語を教えてもらう以外に，人に教えてもらうのではなく自分で英語を勉強していますか

	はい	いいえ	計
度数	43（20.38%）	168（79.62%）	211（100%）

表３は質問②の集計結果である。授業外で自分ひとりで何らかの学習を行っていると答えた者は43名で，全体の20.38%であった。

質問②で何らかの学習を行っていると答えた者は，質問②－Ａにおいて，どのような学習を行っているか自由記述により答えた。一人が複数の学習方法について言及しているものもあり，総数は57件あった。その分類を表４に示す。

表４　質問②－Ａへの回答の分類

カテゴリー	度数	%
試験対策の教材（TOEIC，TOEFL，英検）	21	36.84%
試験対策以外の学習用教材	12	21.05%
テレビ・ラジオ講座	9	15.79%
教材以外のもの（雑誌，本，音楽など）	9	15.79%
ESS	1	1.75%
メールや手紙のやり取り	1	1.75%
その他	4	7.02%
合　計	57	

最も多かったのは「試験対策の教材（TOEIC, TOEFL, 英検)」であるが，これはTOEICなどの試験対策用に作られた，練習問題などを集めた市販の教材を用いた学習である。このカテゴリーに分類されたものは36.84%であり，全体のおよそ３分の１にあたる。

次に多かったのが，市販の教材で試験対策用以外のものを用いた学習であった。この回答のみでは具体的にどの教材を使っているか詳細は分からなかったが，記入されているものを挙げると，ニュースや新聞の記事を自己学習用に編集した教材や，会話を集めた教材であった。これ以外の教材も使用されているものと推測される。このカテゴリーは全体の21.05%を占める。

３番目の「テレビ・ラジオ講座」とは，NHKによるテレビやラジオの英語講座を用いた学習である。これが全体の15.79%であった。

上記３つのカテゴリーは，自己学習用に編集・構成されたものを用いた学習であったが，「教材以外のもの」を用いた学習も報告されている。これは，学習のために作られたものではなく，authenticなものを用いた学習である。どのようなものを使っているか記入されたものを挙げると，雑誌や新聞などから興味のある記事を選んで読む，大学での専門に関する書籍を読む，また，音楽や映画を用いて学習する，といったことであった。

このほか，ESSでの活動で学習をすると答えた者，ネイティブスピーカーとメールや手紙のやり取りをしていると答えた者がそれぞれ１名ずつあった。なお「その他」のカテゴリーは，質問の趣旨にそぐわない回答をまとめたものである。

表５　質問②－Ｂの結果

②－Ｂ　(②で「いいえ」と答えた方)
自分で英語を勉強したいと思いますか

	はい	いいえ	計
度　数	143（85.12%）	25（14.88%）	168（100%）

表５は質問②－Ｂの結果である。質問②で「いいえ」と答えた者（現在自己学習は行っていない者）168名がこの質問に答えた。自分で英語を勉強したいと答えたものは143名で，自己学習を行っていない者の85.12%を占める。

表６　質問③の集計結果

③どのように勉強したら英語が身につくか、自分なりに分かっていますか				
度　数	1	全く分からない	11	(5.21%)
	2	あまり分からない	121	(57.35%)
	3	だいたい分かっている	75	(35.55%)
	4	よく分かっている	4	(1.90%)
		計	211	(100%)

表６は質問③の回答の集計である。勉強の仕方がわかっているかどうか４段階で答えるものである。各段階の人数とパーセンテージを示してある。最も多かったのが「2 あまり分からない」で，121名が回答している。これは全体の半数以上に上る。

4.2　クロス集計

ここでは，学習者のレディネスについてより深く知るために，クロス集計を行う。

まず，質問②－Ｂと質問③をクロス集計した。質問②－Ｂは自分で学習の舵取りをする意思があるかどうか，その willingness を測る項目で，現在は自己学習を行っていないがやってみたい意思があるか答えるものである。これに対し質問③は，学習の方法がわかっているかどうかたずねるもので，舵取りをする ability の認識を測るものである。この２項目をクロス集計することで，willingness と ability のバランスを分析する。結果は表７のとおりであった。

表７　質問②－Ｂと③のクロス集計の結果

②－Ｂ　（②で「いいえ」と答えた方）
自分で英語を勉強したいと思いますか

		はい	いいえ	計
③	1 全く分からない	9	1	10
どのように勉強したら英語が身	2 あまり分からない	83	14	97
につくか、自分なりに分かって	3 だいたい分かっている	48	9	57
いますか	4 よく分かっている	3	1	4
	計	143	25	168

次に，質問①と質問③についてクロス集計を行った。質問①は大学の授業外で指導を受けているかどうかたずねるもので，受けているとすればそれは willingness が高いと解釈できる。この項目に対し，ability の認識を測る質問③をクロス集計することで，実際に学習方法をわかった上で指導を受けているかどうか，言い換えると，指導を受けるという選択が，自分の英語力の向上につながると納得した上で選択したのかどうかわかる。その結果は表８のとおりである。

表8　質問①と③のクロス集計の結果

①大学の授業以外に、個人レッスン、英会話スクールなどで英語を教えてもらっていますか

		はい	いいえ	計
③	1 全く分からない	0	11	11
どのように勉強したら英語が身	2 あまり分からない	3	118	121
につくか、自分なりに分かって	3 だいたい分かっている	1	74	75
いますか	4 よく分かっている	1	3	4
	計	5	206	211

続いて，質問②と質問③のクロス集計を行った。質問①と同様，質問②で「はい」と答えた者は，学習を自ら計画し実行するwillingnessが高いと解釈できる。しかし現在学習を行っていても，それが英語力の向上につながると納得して行っているかどうか，質問③とクロス集計して確かめたい。結果は表9のとおりである。

表9　質問②と③のクロス集計の結果

②大学や英会話スクールなどで英語を教えてもらう以外に，人に教えてもらうのではなく自分で英語を勉強していますか

		はい	いいえ	計
③	1 全く分からない	1	10	11
どのように勉強したら英語が身	2 あまり分からない	24	97	121
につくか、自分なりに分かって	3 だいたい分かっている	18	57	75
いますか	4 よく分かっている	0	4	4
	計	43	168	211

5　考　察

5.1　各項目の集計結果についての考察

質問①の集計結果を見ると，授業以外で指導を受けている者の数はごくわずかである。指導を受けている理由を見ると，ほとんどの者が将来における目標がはっきりとあり，英語の運用能力が不可欠と考えている。これより，大学以外でも指導を受けている者は，英語学習への明確で強い動機があることがうかがえる。ただし，1名は異なる理由を挙げており，一人で学習することが十分かどうか分からないために指導を受けていると答えている。これは質問③とのクロス集計の結果と関連することであるため，後に議論する。

質問①と比較すると，質問②で自己学習を行っている者の割合は多いと言える。およそ2割の者が自己学習を行っていると答えた。質問②－Aよりどのような学習であるか分かるが，多くの者が自己学習用に作られた教材（試験対策の教材，それ以外の自己学習用の教材，放送講座）を用いた学習であることが分かる。この3つのグループをまとめると，全体の73.68%に上り，非常に多くの者が自己学習用に作られた教材を用いていることが分かる。この傾向は，自己学習用の教材は学習の方法や内容が明確に示されており，学習者は教材にしたがって学習を進めることができるという利点があることが考えられる。しかし，これは質問③に見られる，学習方法が分からないという傾向と関連があるのではないかと疑われる。

質問②－Ｂより，今のところ自己学習は行っていないがやってみたいと答えた者は，85％以上にのぼる。この割合は非常に高く，全体的に willingness が高いと解釈できる。

質問③では，「１ まったくわからない」「２ あまりわからない」と答えた者を合計すると，その割合が多い。２つのカテゴリーを合計すると132名になり，これは全体の６割以上を占める。willingness は全体的に高いことが質問②－Ｂよりわかるが，質問③では ability が必ずしも高くないことがわかる。

5.2 クロス集計の結果についての考察

質問②－Ｂと質問③のクロス集計では，現在は自己学習を行っていない者の willingness と ability のバランスを調べた。表７を見ると，willingness が高いが ability が低い者が多いことがわかる。②－Ｂの質問（自分で勉強したいかどうか）に対して「はい」と答えているが，③の質問（勉強の仕方がわかるかどうか）で「１ 全くわからない」「２ あまりわからない」と答えたものの数が，合計で92名である。これは，②－Ｂで「はい」と答えた143名の64.34％を占める。自分で勉強したいという意思はあるものの，どのようにすればよいのかわからないと感じている者が多いことが分かる。

続いて，現在すでに何らかの学習を行っている者は ability があるのかどうか確かめたい。表８では，質問①と質問③のクロス集計がなされた。何らかの指導を受けていると答えた者は５名いるが，そのうち勉強の仕方がよく分かっている，またはだいたい分かっていると答えたのは合計２名である。残りの３名は，勉強の仕方があまり分からないと答えている。この結果から，この３名は英語力を伸ばすために，授業以外でも指導を受けるという選択をしたものの，その選択は確信を持って行ったものではないと言えるだろう。指導を受けている者のほとんどは，将来の目標のために英語が不可欠であるため強い学習動機がある。そのため授業外でも指導を受け，授業外での学習を実際に行動に移しているわけであるが，1名が「自分ひとりで学習するのは十分かどうかわからないから」という理由を記したように，指導を受けるという選択は，どのように学習すればわからないために，あいまいなままなされた可能性が高い。

同様に，質問②と質問③のクロス集計では，現在自己学習を行っている者の ability について分析を行った。その結果を表９に見ると，自己学習を行っている43名のうち，18名だけが学習方法が大体分かっていると答え，半数以上の25名はよく分からない，または全く分からないと答えている。この結果も，とりあえず学習は行っているものの，果たしてその方法でよいのかどうか分からず，手探りで学習を進めているといえるだろう。これは，先に述べた自己学習用の教材を使う割合が高いことと関連するのではないかと考えられる。どのように学習すればよいのか分からないために，学習の内容や進め方が明確に決められている教材にしたがって学習することを選ぶ傾向があるのではないだろうか。

5.3 教育的示唆と今後の研究へ向けての課題

Littlewood (1996) の自律の枠組に基づけば，授業外での学習を促すには willingness と ability を高めることが求められると言える。現状では多くの学習者が willingness が高いものの ability が低く，どのように学習すればよいかわからないと答えている者が多いことが分かる。これは，自主的に学習を行いたいという意思はあるものの，どのように実行に移せばよいのか判断ができない状態であると言える。このような学習者に対して授業外での学習を促すには，教室

外での学習の意義や重要性を説くことよりも，学習法に関する指導など，学習を行うために必要な技能や知識といった側面に教育的介入を行う必要性がある。そうすることで，授業外での学習を行いやすくすることができるだろう。

学習方法に関する介入は，既に授業外で何らかの学習を行っている者に対しても必要だろう。表８と表９から，学習を行っている者でもどのように学習をしたらよいのかわからず，学習方法に確信を持てずに手探りで学習を進めていることがうかがえる。憂慮すべきは，現在は学習を行っているが，学習のやり方に自信が持たないがために，後に学習をやめてしまう恐れがあることである。今後学習を継続させるためには，彼らに対しても学習を行うために必要な技能や知識を与えることが必要となる。

この介入は，単に学習方法を紹介するだけでは不十分である。学習方法の知識を増やすこと以外にも，学習者の言語習得観の影響も考慮すべきであろう。言語がいかに習得されるかという考え方は，学習の仕方に大きく影響すると考えられるため，学習者への介入では見逃せない点である（Victori & Lockhart, 1995）。また，身の回りで活用できるリソースにはどのようなものがあるかといった情報や，学習成果をいかに評価するのかといったことについても考慮すべきであろう。

そのためには，授業の中では英語を学習することに加えて，外国語学習全般についての何らかの指導が必要となるだろう。例えば，外国語学習の進め方について学習者向けに解説する書籍（e.g., Rubin & Thompson, 1994; Lewis, 1999; Leaver, Ehrman, & Shekhtman, 2005）が出版されており，それらを用いて解説することも可能である。あるいは，学習方法を身につけるためのタスクが用意されており（e.g., Ellis & Sinclair, 1989; Gardner & Miller, 1996），そのようなタスクを授業内で行うことも可能であろう。

しかし，学習を舵取りする能力の養成を授業の主目的としている場合を除いて，ほとんどの授業の目的は英語力そのものを伸ばすことにあるため，活動は英語を使う活動が主になる。そのため，授業の中で学習方法の指導などにどれほどの時間が割けるのかという現実的な制約があり，授業内容のバランスに気を配る必要がある。したがって，短時間で簡潔に指導できる方法を模索する必要がある。また，授業の中で学んだことをすぐに授業外に転移できるとは限らないため，いかに転移を促すかという点についても注意を払う必要がある。自己学習を司る力を高めるための介入を既存の授業へいかに組み込むかという点で，工夫が求められる。

ability の面で介入を必要とする者の他にも，willingness が低い者がいることも忘れてはならない。彼らには動機づけの面での介入が必要である。また，willingness も ability も高いが実際には学習を行っていない者もいる。その原因は本調査での範囲を超えたところにあると考えられるが，実際に授業外で学習を行うには多大の時間や労力を必要とするために実行が難しいということが原因のひとつではないかと推測される。この点については今後より詳しく調査する必要がある。

また，本調査の対象は１，２年生が主であったため，３年生以上の学年や大学院生の傾向については調査されておらず，実態が把握できていない。３年生以上の学年には，就職活動や論文執筆などで，外国語の運用能力を必要とする者が多いと推測される。しかしこれらの学年は，教養教育の外国語の授業はすでに終わった段階であり，外国語の授業を履修する機会が限られているため，自己学習の必要性が一層高いと考えられる。今後はこれらの学年も対象として調査を行い，どのようなサポートが必要か考えることが求められる。

引用文献

CIEL Language Support Network (Ed.). (2000). *Integrating independent learning with curriculum*. Southampton, UK: Author.

Ellis, G. & Sinclair, B. (1989). *Learning to learn English: A course in learner training*. Cambridge: Cambridge University Press.

Gardner, D. & Miller, L. (Eds.). (1996). *Tasks for independent learning*. Alexandria, VA: Teachers of English to Speakers of Other Languages, Inc.

原口厚 (2004)「自立的学習能力の育成に重点を置いた読解教育－二・三年次の学習者を対象とする大学ドイツ語教育の一例－」板山眞由美・森田昌美（編）『学習者中心の外国語教育を目指して　流通科学大学ドイツ語教授法ワークショップ論文集』三修社

Leaver, B. L., Egrman, M, & Shekhtman, B. (2005). *Achieving success in second language acquisition*. New York: Cambridge University Press.

Lewis, M. (1999). *How to study foreign languages*. Basingstoke: Macmillan.

Littlewood, W. (1996). "Autonomy": An anatomy and a framework. *System*, 24, 427–435.

Naiman, N., Fröhlich, M., Stern, H. H., & Todesco, A. (1996). *The good language learner*. Clevedon: Multilingual Matters. (Original work published in 1978).

Rubin, J. & Thompson, I. (1994). *How to be a more successful language learner* (2nd. ed.). Boston: Heinle & Heinle Publishers.

竹内理 (2003)『よりよい外国語学習法を求めて　外国語学習成功者の研究』松柏社

Victori, M. & Lockhart, W. (1995). Enhancing metacognition in self-directed language learning. *System*, 23, 223–234.

ABSTRACT

Out-of-class learning of English as a foreign language: A preliminary study

Takamichi ISODA
Institute for Foreign Language Research and Education,
Hiroshima University

This article reports on a preliminary study on college students' out-of-class learning of English as a foreign language. This survey was conducted with the intention of gaining insights about what is necessary to promote students' independent learning.

Teachers of English as a foreign language hope that students study the language even without their supervision. This reflects one of the difficulties that college foreign language education faces. The number of class hours is so limited that classroom teaching can hardly realize solely the goals of foreign language education at college, which include high standards such as helping students attain high proficiency in English for academic and occupational purposes. One way to overcome this limitation is to promote students' independent learning.

A questionnaire was administered to 211 students, mostly freshmen and sophomores, at Hiroshima University. Items include those which reveal what they do to learn English outside the classroom and those which ask about their views about independent learning, specifically, their willingness to learn independently and their perceived ability to take control of their own learning. About 20% of the students are found to conduct out-of-class learning. Most of them reported they use commercially-available teach-yourself materials. The most popular type of materials is those for test-preparation. Although a lot of students do not do anything to learn English outside the classroom, more than 85% of them said that they want to start learning English independently, indicating high willingness to learn independently. However, more that 60% of them said they are not sure what they can do to learn the language. Perceived low ability was also observed among the students who have been learning independently. These results suggest that in order to promote out-of-class study, classroom instruction should incorporate learner training.